

11月27日に政策秘書課職員と話をした内容です。

これから日本は、初めての人口減少社会を経験します。2050年には、日本の人口は、今の約1億2,700万人から、昭和30年ごろとほぼ同じ約9,000万人になると言われています。長久手の人口は、2045~2050年頃の約64,000人をピークに、以降は減少すると推計しています。本市でも人口が増えると言っても、子どもの数(0~14歳)は、2010年をピークに既に減っています。2050年には、65歳以上が人口の3割を超え、約20,000人になります。

## 価値観を見直す

人口が減っていく社会、降りてゆく時代は、これまでと正反対の価値観が必要な時代になるかもしれません。今までやってきたことを否定する時代になるかもしれません。それを認めることができるか否かに関わらず、受け入れるしかない、そういう時代が変わっていくと思います。

正反対の価値観、ものの見方とはどういうことでしょうか。

介護の現場で、1時間に10人の入浴介助ができる職員と、1時間に1人しかできない職員がいたとします。これまでの価値観では、前者は「仕事ができる職員」、後者は「使えない職員」という評価でしょう。でも、1時間に1人しか入浴介助ができない職員は、利用者から見れば、「丁寧にやってくれる良い職員」です。

価値観が変わると、評価が変わります。人口が減っていく時代、降りてゆく時代には、「10人の入浴介助ができる職員は素晴らしい」「1人しかできない職員はダメだ」という、これまでの価値観だけでは、立ち行かない時代になっていくのです。

そして、これまでの価値観だけでは、市民が主体となった「新しいまちのかたち」はできないと思うのです。



## 「専門家の視点」から「一人一人の立場に立った視点」へ

市民が主体となる「新しいまちのかたち」を作っていくには、これまでの「きっちりやる」「効率的にやる」といった事務的な考えである「専門家の視点」から、生活の場に息づいた「一人一人の立場に立った視点」に変えることが必要です。

市民に対しても、ひとくくりにしか見ることができなかった時代から、一人一人に思いを馳せる時代になっていくことが求められます。

	主体	構造	特色
これまで	専門家主体	制度 (効率的、時間がかからない)	・義務感 ・切り捨てるものがある(当てはめ)
新しい まちのかたち	地域住民主体	手作り (非効率、時間がかかる)	・達成感 ・切り捨てるものがない(融通無碍)

市民が主体となる「新しいまちのかたち」を作っていくためには、子どもも、障がい者も、高齢者も、誰もが、「自分は必要とされている」「人の役に立っている」と感じられることが必要です。それはつまり、誰にでも、地域に「役割」と「居場所」があることです。

人口が減っていく時代、降りてゆく時代には、これまでのように行政が何もかもやってしまう社会では成り立っていきません。「地域のことは、地域で考え、前に進む」ことが求められます。

今、市は、どうしたら市民のみなさんと一緒に「新しいまちのかたち」を作ることができるのか、どうしたら誰にも「役割」と「居場所」がある長久手にできるのか、試行錯誤しています。その方法や仕組みも、市民のみなさんと一緒に考えていきたいのです。

今の長久手市なら、人口が減り、行政だけで立ち行かなくなるまでに少々時間的に余裕があります。今は、土を作り、種をまき、育てている途中です。芽が出て、花が咲くまでは、まだまだ時間がかかります。

ぜひ、市が行うさまざまな会合、取組みに関心を持っていただき、さらに多くの市民のみなさんに参加してもらいたいと思います。そうした話し合いなどを通じて、市民同士が知り合うことで、「新しいまちのかたち」の土壌がより豊かになっていくのです。

～市長の話を聞いて～

私自身、今まで、近所づきあいをほとんどしてきませんでしたが、今、住んでいる地域で「支え合いマップづくり」という会合に参加しています。同居している親が高齢になるにつれ、こうした会合を通じて、近所に知り合いが増えるのは、ありがたいことだと思うようになりました。

地域に知り合いが増えることで、地域で何が生まれるのかは、まだ始まったばかりでピンときませんが、こうした「知り合いを増やす」「地域のことをみんなで考える場を持つ」ことの積み重ねが、これからの長久手では大切なことなんだと思います。